チワン族における花婆信仰習俗について

陳　　雅　然

The custom in the belief of Yah va among the Zhuang people

CHEN Yaran

In the Zhuang people'custom,the goddess Yah va was commonly inshrined at their own altas.In addition,the Zhuang people would preside over religious ceremonies that related to goddess Yah va when significant moments,like various life ritual (birthday,adult ceremony,wedding,funeral) or any other big events such as being sick,moving somewhere to live,or having no babies et al,came to their lives. A comprehensive analysis and summary of fork activities of the Yah va through documental materials and field researches.

キーワード：花婆信仰　習俗　儀礼　日常的の信仰の活動

はじめに

花婆はチワン族の信仰する花の女神である。本論では花婆信仰に関する活動について、民衆の日常的な信仰の現場の分析を通じて、チワン族民間花婆に関する信仰の現状について紹介する。

生きている民間信仰として、チワン族では大規模な花婆信仰儀式が行なわれる。チワン族の研究において、花婆信仰儀式についての考察は多くの成果をあげた。

張小娟は「論滿月儀式中巫婆與花婆信仰的關係――以廣西靖西縣其龍村壯族人的滿月儀式為例」において、広西の靖西に住む一家を取り上げ、子供の満月に行う嬰児のための「叫魂」、また母子の無事を祈るための儀式を調査した[1)]。金乾偉は「文化生態視域下的壯族花婆信仰與鄉村儀式演劇共生研究」において、花婆崇拝が形成されるための特定の文化地理環境を述べ、花婆神話と地方演劇の共生関係について検討する[2)]。李素娟，賈雯鶴は「壯族花婆神話與“求花”儀式的文學人類學解讀」において、宜州市中枧

1）張小娟「論滿月儀式中巫婆與花婆信仰的關係――以廣西靖西縣其龍村壯族人的滿月儀式為例」（『柳州師專學報』2009年第２期）５頁。

2）金乾偉「文化生態視域下的壯族花婆信仰與鄉村儀式演劇共生研究」（『戲劇藝術類』2016年第３期）110～115頁。

屯を調査地として、中梘屯仙婆家において行われる「求花」の儀式を記録する[3)]。

彭誼は「以村落為中心的地方性集體祭祀儀式――廣西平果縣感圩屯花婆廟個案考察」において、感圩屯の地域的な状況と花婆信仰の現状について紹介し、感圩屯の旧暦二月十九日に行われる花婆生誕日の儀式を記録する[4)]。

廖明君は『壮族自然崇拜文化』に広西の靖西、德保、那坡、大新、天等などの地方に存在する「架橋求花」、「圍花」、「護花」、「解節」、「開花」の儀式、広西の武鳴県西北部と馬山県東部地方に存在する「求子送花」の儀式、広西来賓県の「求花立花婆神位」法事、ムーラオ族地域の「添花架橋」の習俗と各地各族の「花婆節」について考察する[5)]。

花婆信仰は依然としてチワン族民衆の生活に息づくものである。当然ながらフィールドワークを重視する研究者の間で、各地の花婆信仰儀式についての成果はますます増えていくであろう。

しかし、花婆信仰習俗の研究は、多大な研究成果を得ていたが、チワン族及びその他の民族の民間信仰での重要性と比較すると、まだ足りないところがある。特に花婆信仰に対する体系的な考察と研究については、いまだ不十分であると考える。本文は資料文献を広く渉猟したうえで、さらにフィールドワークを行い、深く調査を進めていく。そしてチワン族の花婆信仰習俗の全貌について明らかにしたい。

一、花婆信仰で行われる儀礼

花婆信仰活動の現場とは、花婆の儀礼が行われる空間や時間などを含むものである。ここでは、数々の事例から、花婆の儀礼が行われる実態について、種々の事例から判断する。

1　花婆信仰の実際

花婆に関する信仰活動はおもに通過儀礼（誕生儀式、成人儀式、婚礼、葬儀など）或いは花婆誕生日期間で行われる。それ以外にも、転居する時、体調不良の時、家族が夭死した場合などの特殊な状況でも、花婆に関する儀礼が行われる。

A　通過儀礼

チワン人は誕生儀式、成人儀式、婚礼、葬儀などの人生重要な時期に花婆に関する信仰活動を行う。『壮族巫信仰研究與右江壮族巫辭訳注』に次のように記録がある。

> 婦女懐孕時，怕小孩出生没有靈魂，就要請麽公到野外求花，還要在路邊水溝做架橋儀式，把花從橋上接過來。生下小孩就請巫婆到野外去請花，摘一把野花放到産婦的床頭來安花婆神位。……直到這

3）李素娟・賈雯鶴「壮族花婆神話與“求花”儀式的文學人類學解讀」（『雲南社会科学』2013年第５期）106～110頁。

4）彭誼「以村落為中心的地方性集體祭祀儀式――廣西平果縣感圩屯花婆廟個案考察」（『廣西社會科學』2008年第10期）17～20頁。

5）廖明君『壮族自然崇拜文化』（廣西人民出版社・2004年）266頁。

小孩長大結婚，母親的床頭花婆神位才能拆除。[6)]

このように、チワン人は子供が誕生した後、巫婆を招いて、花婆の位牌を安置する儀式を行う。また『壮族麽文化研究』にはこうある。

當小孩出生時，就由娘家請巫婆到野外去接花婆神進屋。方法就是到野外摘一把野花，紮在母親床頭牆上，立下香爐，……花婆神就會保護小孩的生命。[7)]

子供が誕生した後、野外の花を束ね、母親の枕元で安置すれば、花婆の位牌になる。さらに香炉を置いて祭祀を行う。この位牌は子供が成人になったら、家から送り出すことができる。

チワン人が結婚する前後にも花婆に関する儀式を行う。『南丹土司史』には次のように記録する。

兒子長大結婚的前夜，都要舉行“還花願”儀式，請師公或巫婆做法事，祭祀花婆神，感謝花婆神送子、送福祿，祈禱代代人丁興旺，俗稱“還花願”。不僅婚後（久不）生育的婦女要在房中立花婆神的神位祭祀，以求生育，就是已生育和新婚的婦女也在房中立花婆神神位祭祀，俗稱“安花”。[8)]

このように結婚などの人生の区切りの時々で、チワン族の人々は花婆を祭祀する儀礼を行う。ひとつには花婆が子供を授け、成人まで加護してくれることに対する感謝もあり、ひとつには新しい生命に対する希望を表すため、新婚夫婦の部屋において花婆の位牌を安置するのである。

さらに、結婚式や婚後妊娠しない時に「求花」儀式を行う地方がある。「求花」儀式とは、花婆に花を求める儀式である。即ち、求子儀式である。花婆の最も重要な役目は子供を授けることであるが、求花儀式はめったに見かけない。一つは宗教職能者は求花儀式が自分の福運を損傷すると考えられているため、数多くの求花儀礼を行いたがらないためである。一人の宗教職能者は、一生のうち数回しか求花儀礼を行えない。二つは求花儀式を行う時、多くのタブーが存在している。例えば、ある地方では36歳以下の若者が参加するのを禁止し、ある地方では女性の参加は許されない。

筆者は河池市巴馬県那社郷那勤村六腰屯の黄師公を訪問したところで、六腰屯の求花儀式が36歳以下の若者が参加するのを禁止すると知った。求花儀式を司る師公も年配で子供が成人になる師公しか行われない。

筆者が訪問調査を行った師公の名は黄定尤という、道号黄道金である。年齢は83歳。その祖父と父も大師公[9)] である。二十代から「魔」公を学び始め、三十歳になる時「師」になった。「師」名黄善芬であ

6）黄桂秋『壮族巫信仰研究與右江壮族巫辭譯注』（廣西民族出版社・2012年）97頁。

7）黄桂秋『壮族麽文化研究』（民族出版社・2006年）68頁。

8）玉時階・胡牧君・何文鉅・杜宗景・緱廣則『南丹土司史』（民族出版社・2015年）345頁。

9）大師公：六腰屯の師公には「魔」「師」「道」三つの等級がある。魔から師に、師から道となる。師等級の師公は、小さな道場しか司ることができない。道等級の師公は大きな道場を儀式を行うことが可能である。大師公とは「道」に至る大きな道場を司会できる師公のことを指す。

る。四十九歳で「道」になった。一族の第十代目の後継者になった。「道」になってから、周辺村落の慶弔事は多数、彼に頼んで行ってもらう。一年中儀式を行っている形である。

黄師公

黄師公の話によると、求花儀式で「招花」一環があり、赤い布で四方八方に振り回す。霊魂を招いて、求子者の子供に転生するの寓意である。六腰屯の村民は36歳以下で亡くなった霊魂は花婆の処に行って、再び転生すると考えられている。儀式に布を振り回す時は、36歳以下の若者の霊魂がまだ安定していない。そのため霊魂が去っていく可能性があるので、「救一方害一方」という行為になると師公は考える。そのため、若者が求花儀式に参加しないのは村の不文律となっている。もしその日に山に求花儀式が行われるなら、若者はその山に近づかない。子供がいる家も赤い卵をゆで、花婆位牌の前に供え、子供の平安健康を祈る。だからこそ求花儀式のその真の姿はとらえにくい。

チワン族諸地に新生児が誕生後には、人生の通過儀礼の一種として、新生児のため花婆の儀式を行われる習俗が存在している。その目的は、花婆に新生児の出生を報ずる以外に、花婆に感謝して、新生児の健康を祈る目的、或いは花婆に再び花を送ってもらい、主家が子孫を増やすなどの意味も含む。広西百色市の靖西地方に新生児の為架橋儀式を行う習俗がある。筆者は、二回ほど現地調査を行った。

靖西にはすべての家庭が花橋[10] を神棚に左側に安置する。

儀式中に使われる花橋

10）花橋：黄色い花の切り絵を貼っている木の板である。大きさは本と同じである。

村民の話によると、この花橋は花婆の化身であり、花婆が天上の花園から降りた時に、必ずここを経過する。外屯の架橋儀式は巫婆によって行われる。新生児のため行われるのが一般的である。その目的は新生児の誕生を花婆に報告し、花婆が儀式で架設する花橋を通って主家に降りって新生児の世話を手伝い、その健康生長に加護するのを祈ることである。

新生児の出生を花婆に報告し、新生児の健康を祈る目的で行われる儀式は、架橋儀式以外にも、新生児満一歳に行われる送花-昇花儀式もある。筆者は南寧市青秀區伶俐鎮汶水坡の家族が子供二歳[11]に行う送花－昇花儀式も見ることができた。

南寧市青秀区伶俐鎮は南寧市東部にある。汶水坡は伶俐鎮王京村管区の自然村の一つである。

汶水坡

汶水坡では家々の壁には神棚を架けている。祖先、土地、花婆を供養する。神棚に三つの香炉と一個花の鉢を安置する。左の香炉では土地に、中央の香炉では祖先に、右の香炉では花婆に焼香する。花の鉢は花婆の香炉の右に設置し、花婆位牌を象徴するものである。

汶水坡鄭家の神堂、壁に神棚を架けている

11）普通の送花－昇花儀式は子供が十二朝、滿一か月、満一歳に行われる。今回の儀式は子供が二歳の時に行われたものである。それは祖母が村の幹部なので、近年中国政府が廉潔建設を強化し、幹部が儀式という看板をあげて財物を搾り取ることを防止するため、幹部が盛大な宴席を設けるのを厳禁されていたことによる。その故、子供がうまれてから送花-昇花儀式を行うことができなかった。二歳になる際に、祖母も定年に近い、上級からの規則にたいして以前より忠実である必要がなくなった、そして今回行わないと以後は儀式を行う機会もうないと考えて、子供二歳の時で儀式を行うと決めた。

汶水坡の送花－昇花儀式は、主に道公が外祖母家から送ってきた花を花婆位牌に安置することを主体とする。儀式の目的は花婆に新生児を加護してもらうだけでなく、花婆に「年年開花，年年結果」のように主家の子孫繁栄を祈る寓意がある。

汶水坡の送花－昇花儀式中道公が花を花婆位牌に挿す

チワン族の地方では葬儀においても花婆に関する祭祀を行う。16歳以後で死亡するチワン人は「祖先」と呼ばれ、祖先と呼ばれる亡者には花婆に、再び子孫に花を送ることを要望できる。死亡当時の年齢によって、送る花も「福花」、「祿花」、「寿花」の三つに分かれる。60歳以後に死亡する人は家族に最高級の「寿花」を送ることができる。そのため、60歳以後に死亡する人の葬儀は特に荘重である。

師公などの宗教職能者は儀礼において独特な「踩“花燈”」活動を行う。『嶺西族群民間信仰文化探究』にその活動について次のように記録する。

> 師公與道公在長者喪葬儀式上會有一個節目即踩“花燈”。只有六十或六十歲以上死亡，亡者的葬禮才有該節目，……師公、道公為亡靈踩“花燈”送“壽花”，其升入天界成為家庭的祖先。此後，其才有資格要求花婆為子孫送“壽花”，有能力護理“花”，讓後代繁衍不息。壯家人認為長者去世相當於一朵老的花兒枯萎了，其在世親屬可以向花婆請求賜予一朵嫩的花兒，讓新生兒降生家中，而後人是祖先血脈的延續，這便實現了生命的延續，使亡者實現某種意義的長生。[12)]

花婆信仰はチワン族民間に広範な影響力を持っている。チワン族の家庭には往々にして花婆の位牌がある。毎度の朔月と満月には、必ず焼香し礼拝する。ある地域では、結婚、産子、死亡などの人生の重要時期には、宗教職能者を招いて儀式を行う。宗教職能者が司る花婆信仰儀式の種類は、実に多様である。花婆に花を求める架橋儀式、花婆に子供の健康を加護する有嗣架橋儀式、新生児の一歳昇花儀式、花婆に病気や災難を駆除してもらう解関儀式と上花園儀式など、枚挙にいとまがない。

B　花婆生誕日

花婆の生誕日には、民衆が集団で大規模な民間信仰活動を行う。多くの文献や地方誌などでは花婆生誕日で行われる民間信仰活動を記載する。現在調べられる花婆に関する文献の記載は万暦年間の『広西

12）黄桂秋『嶺西族群民間信仰文化探究』（光明日報出版社・2015年）110頁。

通志』である。チワン族先民の花婆を祭祀する状況の記載がある。

万暦『廣西通志』にはこのように記載する。

又數年延師巫結花樓，祀聖母（即花婆），親族男婦數百幹人歌頌號叫、劇戲，三四日夜乃畢，謂之作星。[13]

『嶺表紀蛮』には、花婆生誕日を旧暦の二月二日とし、「作星」という儀礼について記載する。

獞俗祀“聖母”，亦曰“花婆”。陰暦二月二日，為“花婆”誕期，搭彩樓，建齋醮。延師巫唪誦，男女聚者千數百人，歌飲叫號，二三日乃散，謂之“作星”。[14]

他の地方誌でも「作星」を記載している。『桂平県誌』にも記載があって言う。

獞俗每數年延師巫、結花樓祀聖母，親族男女數百千人，歌飲號叫，劇戲三四日夜乃畢，謂之作星。[15]

また『上林県誌』にもこうある。

二月初二日花婆誕辰，建齋，演戲三日夜，群放花爆，求子者競搶爆頭，以為吉利。[16]

これ以外にも、『潯州府志』も同様の記載がある。さらに民国二十六年鉛印本『來賓縣誌』には次のようにある。

六月六日，本宋真宗受天書之日，謂之「天貺節」。鄉俗亦未知此故事，以是日為「花林聖母神旦」，攜小兒詣神祠拜獻牲酒，冀得福佑，間有賽會游神者。縣城東門城樓上所祀花林聖母，刻檀木為像，手足活轉有機，外著錦繡冠服。先神旦之二日，有婦女結會詣神祠，閉門奉神像沃香湯裸澡之，仍加冠服奉神歸座，所以表虔潔也。[17]

『來賓縣誌』には、地元の民衆は六月六日の天貺節を花婆生誕日とすることを記載する。この日は花婆を祭祀するために、師公を招いて師公劇を演じさせる。それは「調廟」と呼ばれる。また子供を連れて廟に参拝し、時には「賽会游神」などの活動も行われる。

上記の文献によれば、花婆生誕日に、彩橋を架けて、巫覡を招いて読経し、法事と演劇を行って花婆

13）彭澤修『廣西通志（1－2）・明代方志選（六、七）』（臺灣學生書局・1965年）673頁。
14）劉錫蕃『嶺表紀蠻』亞洲民族考古叢刊第五輯（南天書局・1987年）189・196頁。
15）黃占梅修・程大璋纂『桂平縣誌』中國方志叢書第一三一號（成文出版社有限公司・1968年）1140頁。
16）黃誠沅『上林縣誌』（成文出版社有限公司・1968年）。
17）翟富文『來賓縣誌（一、二）』（成文出版社有限公司・1975年）285頁。

を祭祀する。ただ財力に限りがあるので、往々にして数年で一度しか大型の祭祀活動は行われない。

広西来賓鰲山地方では、毎年旧暦の三月三日は「花王節」で、六月六日は「花婆誕」である。大型の花婆廟会を行われる。その中に六月六日の花婆廟会が最も盛んである。旧暦三月三日は来賓の婦女が子供や婚姻の縁を求める日であり、花王節と称する。人々は鰲山花婆廟に参拝しに行く。廟内には、宗教職能者がおり、彼らに頼んで上香儀式をやってもらえる。参拝後、婦女たちは常に三々五々に鰲山で花を摘み、相互に帯びさせてあげる。六月六日は花婆生誕日である。その時は、花婆廟会が三日間続く。鰲山では最も盛大な廟会である。毎年参拝しにくる信者が数万人いる。信者が先着順で拝礼して願を掛け、道公を頼んで上香儀式を行ってもらう信者もいる。その後、廟のうしろの泉に行って、行列に並んで聖水を飲む[18]。

民国二十六年の『來賓縣誌』には当時の廟会の娯楽活動について、次のように描写する。

> 有他方人過境售劇，偶一開演；或賽會酬神，則必聘諸他方。縣城馮聖窟、城隍廟及龍洞、鰲山各有一戲台，余皆臨時設備，事罷輒撤卸。近日新學青年稍稍習白話戲，亦未能稱擅場。舊時舞龍舞獅之戲，於令節、神旦，群情所歡，相共奏技，或雜以拳擊術，鉦鼓鞳鞳，爆竹腷膊，頗極一時壯觀。又有無賴游食，不對就街市隙地開演猴戲及其他眩術戲（俗呼「花眼法」），或設幃演傀儡小戒，亦皆他方人過境所為也。[19]

昔、鰲山廟会では必ず師公班を招いて、演劇を神に奉納する。しかも、舞龍舞獅を行い、爆竹を鳴らし、闘鶏を行って、太鼓を叩き、猿芝居などを行う。また舞台を立てて人形芝居を行う者もあり、非常に賑やかである。

現在、花婆生誕日にはチワン人が依然として盛大な儀式を行っている。

南寧市城中村陳東村に花婆廟があり、毎年旧暦の三月六日が陳東村花婆生誕日である。その都度、村民達が自発的に祭祀活動を行い、師公を招いて祭祀させる。師公は花婆廟の前に祭壇を設置し、橋を架け、師公劇を行う。

南寧市江北大道の近くに一つの廟がある。その名は「五通廟」である。此処には毎年旧暦の三月六日に祭祀活動花婆誕が行われる。筆者は2017年旧暦三月六日に五通廟で行われる花婆誕を参加した。その日には参詣者が雲集する。五通廟の前では、道公が読経する、師公が演出を行い、たいへん賑やかである。

18）何志敏『從神聖到世俗――壯族創世女神姆六甲到生育女神花婆的嬗變』（中央民族大學・文学和新聞傳播學院・修士論文・2008年）。

19）翟富文『來賓縣誌（一、二）』（成文出版社有限公司・1975年）287頁。

五通廟で主壇師公が橋の前に降神する

近年、民間信仰活動に対して、政府が寛容な政策を実行するので、広西各地に民間信仰が復興の兆しを見せている。各地の花婆信仰に関する集団活動の規模も不断に拡大しており、形式も増えている。花婆生誕日や花婆節や花婆廟会など花婆信仰と関する各種の活動が盛んになっている。

C　出来事に対する儀礼

これらの時期以外でも、人々がある出来事に面した時にも、花婆を祭祀する儀式を行う。例えば、新居に転居する時や重病や結婚後の不妊などが挙げられる。

子供を授けるのは花婆の最も重要な性格であり、花婆に関する儀礼の中で、「求子」の儀礼は欠かせない。

『防城港風物志』に次のように述べる。

> 防城港地區一帶的壯族還流行為未生育的已婚婦女舉行“安花”“培花”“架橋”等求子之俗。……如果婦女婚後多年不孕，則認為是該婦女前世所修的功德不够，致使花道不通，或是花婆神不賜給花種，需要請人舉行“架橋”“培花”或“安花”儀式，祈求花婆神賜花，並使花道通暢。[20]

『防城港風物志』には、その地の女性が結婚後に不妊する時の「求子」儀礼を行う状況を紹介する。

チワン人は花婆の花園の花が虫に食われたり、水が不足したりすると、人が病気になると信じる。逆に言えば、人が病気になったら、花が虫に食われ、或いは水が不足した証左である。その時、人々は花婆に花を加護させるため、巫覡を招いて、儀礼を行う。

『句町國史』に次のように記録する。

> 至今，滇東南和桂西地區的壯族仍然崇拜花婆，說世上所有的人原本都是花婆百花園裏的花朵，每家的小孩也都來自花婆的百花園。回此，誰家的小孩哭鬧或是生病，都認為與花婆密切相關，要請咪摩來做法事並在其床頭插花請神，並為小孩安魂。[21]

20）盧岩『防城港風物志』（灕江出版社・2015年）260頁。

21）何正廷『句町國史』（民族出版社・2011年）287頁。

子供が泣き騒いたり、病気になったりすると、巫覡を招いて、花婆を神降ろして、子供の鎮魂を行う。『嶺西族群民間信仰文化探究』には次のようにある。

> 小孩生病時，就請巫婆走神去“看花”，如果巫婆說小孩的花枯了，就請花婆幫淋水。有蟲除蟲，有草除草。[22]

チワン族民間では「還花婆債」の説があり、生来体が弱くて多病であったり、運勢が悪かったりする人は、生まれる前に花婆に何らかの借りがあり、返済しきれていないと信じられている。健康と幸運を取り戻したいなら、巫覡を招いて、「還花婆債」の儀礼を行ってもらう必要がある。

チワン人が悪運と災難は一種の鬼怪の仕業だと考えられ、宗教職能者を招いて儀式を行い、その鬼怪を駆除する必要がある。幾つかの地方では解関を「解邦」と呼ぶ。邦とは、チワン語で悪運と災難を指す。呼び方が異なるが、その儀式の目的と性質を究めると差はないと考えられる。靖西の百色市には、よく様々な「解邦」儀式が行われる。

新生児に解関儀式を行う習俗があるのは、一つには人が生まれつき煞や悪運などを持つ、解消しなければならない者がいるためと考えられる。二つには子供に対する愛情の重視で、一生に遭われる予想中の悪運や災難を駆除し、健康と万事順調を祈るためである。

靖西地方では、新生児のための解関儀式を行う習俗が一般的である。靖西の呂那村外屯もそうである。呂那村外屯の解関儀式[23]は道公が行う。儀式の目的は新生児のため予想される関煞を駆除し、生長の健康を祈る。架橋儀式と同じく、対象は新生児である。同じ新生児のため行われる花婆に関する信仰活動なので、この二種類の儀式は分けて行っても、同時に挙げても良い。主に主家の願望によって決められる。呂那村外屯の解関儀式は主に道公が経を唱えることを主体とする。

解関儀式は関煞と人生の失敗などに対して行われる儀式である。しかし、チワン族の民衆が現実で病気などの困難に遭った場合は、花婆信仰に関する儀式を行う。その儀式は百色地方に「上花園」と呼ばれる。

黄桂秋は『壮族巫信仰研究與右江壮族巫辭譯注』[24]で百色地方の「上花園」儀式について紹介し、次のような描写がある。

> 如果陽間人生病或有災難，說明在花根、花莖、花葉和花朵中有某部分存在蟲咬、葉枯、莖折、花萎等現象。因此，巫師問卜時，就必須帶上兵馬進花園去細查主家花盆中的全株花，據巫師和坐梅花緣的人說，花園有十二個，共一個大門。大門有兩個門衛，……巫師的兵馬進花園時必須給他們燒紙錢，進花園後就找管花婆說明來意，求得同意，方能查看，看清楚後，祖師或花婆才報給陽間，然後告別花婆和門衛，打馬回壇。

22）黄桂秋『嶺西族群民間信仰文化探究』（光明日報出版社・2015年）109頁。

23）「解關」の「關」が経書に他の書き方がある、「丹」の点を取る、扉が半分開いていると表す。

24）黄桂秋『壮族巫信仰研究與右江壮族巫辭譯注』（廣西民族出版社・2012年）502頁。

百色地方の「上花園」儀式の主体は巫婆が兵馬を連れて天に上り、花園に主家の花の状況を見ることである。その大多数は人が病気や災難に遭う時に行われる。子供のために上花園儀式を行う家庭もある。巫婆が子供に何かの「関煞」や「邦」などを持っていないか、儀式を行って解消させる必要があるかを花婆の代わりに見てもらうの目的である。

解関儀式と「上花園」儀式は、チワン族の民衆が災難や疾病に対応する時に行われる儀式である。だが、両者には区別もある。筆者の調査によると、解関儀式が未来に予想される災難を解消させるため行われる儀式であり、上花園儀式は災難が発生した時に行われる儀式である。

嬰児が早世する場合も花婆に関する信仰活動を行う。『嶺西族群民間信仰文化探究』に次のように言及する。

> 倘若壯家孩子在出生後三天或一個星期就不幸夭折，其家人就會將其埋在自家屋簷下、家中或附近的菜園，並拿一個雞蛋在其墳上豎立起來，再拿雞蛋回家中祭拜花婆神位。壯家人認為每個人都是花婆後花園裏的一朵花，簡單地從墳上撿回一塊土塊，放在其母親的床下，意味撿回這朵逝去的花，以讓該婦女來年繼續孕育孩子。[25]

平果県鳳梧鎮のチワン人は、生まれてすぐ夭折する嬰児のため、花婆を祭祀する儀礼を行う。花婆にこの子を母親に再び授けるようにと願うのである。

鳳梧鎮のチワン人は16歳以下で死亡する霊魂は花に戻ると考えている。父母が彼らに葬式を行うと、花婆が彼らを再び世間に授けると信じている。そして16歳以上で亡くなった者は「祖先」と呼ばれる。「祖先」は輪廻しない。家族が葬式を行ったら、花婆に家族に花を授けるのを願う。そのため葬式では必ず花婆に関する儀礼が行われる。

柳州地方では36歳未満で死亡する者は「祖先」と認められない。師公が司る儀礼で、花婆のところに戻し、再び花に還元し、また世間に来ると信じられている。

筆者が南寧市伶俐鎮では、村民の家に常に三つの香炉を安置し、それぞれ祖先、土地神、花婆を供養する現象を見ていた。村民の話によると、新居に転居する時などは、必ず先に儀式を行い、花婆を降ろして花を安置する。

それ以外、チワン族の民衆は病気や夭折、新居に転居などの特殊な出来事の時に花婆を祭祀する儀式を行う。

これより、チワン族民衆が誕生儀式、成人儀式、結婚儀式、葬式などの人生の重要な通過儀礼において花婆に関する信仰儀式を行うことが理解できると思う。またそれ以外にも、病気や新居に転居、不妊などの出来事があれば花婆に関する儀礼を行う。

2　花婆に対する儀礼を行う場所

花婆に関する儀礼は主に庭を含み家屋（家の中で祖先、土地神、花婆神の位牌をする部屋）、村中の廟

25）黄桂秋『嶺西族群民間信仰文化探究』（光明日報出版社・2015年）109頁。

と村落の公共スペースなどである。家庭を含む個人が花婆の儀礼を行う場所は主に家の中である。チワン族の民衆の家の花婆の位牌は主に家屋の神龕と、母親の枕元に安置している。伝統的な祭日では花婆に線香を供える。また結婚前後の「求子安花」の儀式、誕生儀礼の「還花婆愿」或いは「插花」の儀式、葬式の「還花」の儀式など、すべて家屋や庭で行われる。

村落集団において行われる花婆の儀礼は、主に廟宇や公共空間（小さな広場や空地など）で行う。花婆生誕祭は村中の花婆廟で行う。花婆廟がない村落、例えば、南寧市近郊邕江江畔の新陽雅裡村では五通廟で、その他の神々と祭祀を共有する、その村の花婆誕祭は五通廟及びその庭で行われる。

家屋や廟宇を除いて、村落の公共スペースも花婆信仰儀式を挙げる重要な場所である。花婆廟がない村落、或いは花婆廟が小さい村落は村の他の公共スペースで花婆信仰の儀式を行う。

二、民衆の日常的な信仰の活動

一般民衆の日常的な信仰の活動とは、宗教職能者が司る儀礼と集団で行う活動を除いて、日常生活のなかで、民衆自身が家族や親族だけに行う花婆に関する活動のことを指す。

一般民衆の日常的な信仰活動について、『壮族風俗史』に次のように述べる。

> 廣西隆安壮族人嫁女有“散花”儀式，意在祝其生活美滿幸福。……廣西都安壮族人出嫁的女兒在為父母辦喪事時在棺罩上插花，然後由女婿將花帶回，安置在臥室裏，稱作“花婆神位”，目的是祈求生兒育女。[26]

都安チワン族に嫁いだ娘が、父母の葬式で花婆の位牌を立てる習慣がある。

『多元視野中的來賓壮族文化』では来賓地方で行われる「求子問花」の習俗を次のように紹介する。

> 過去，今興賓一帶（來賓縣）壮族民間，在青年男女結婚後不久，就由家婆拿著供品到花婆廟去祭拜和搖簽問卦，卜問自己的兒媳婦有沒有生育能力，第一胎是生男還是生女，俗稱“問花”。如果求得了有生育之簽，就上香祭拜，祈求花婆賜給五男二女（這是壮族民間所追求的生育兒女的最佳模式，象徵著生育的完美，凡生育五男二女者，被認為是命相最好、最有福氣之人家，標誌著人丁興旺，因而受到世人的敬慕與尊重），俗稱“求花”。……婦女們在每年臘月時節，要舉行“求花”活動，……婦女們上山採摘野花，然後回到家中神台前焚香祭祖，並將采回的野花插在神台上，祈求花婆神及祖宗之靈保佑添丁送子，人丁繁衍。[27]

来賓地方には花婆廟があり、男女が結婚する後、姑が花婆廟に参詣し、占いをする。これを「問花」、「求花」と称する。師走の時期に、婦人が自発に野外で花を摘み取って、家で花婆と祖先を祭祀する。

26）農学冠『壮族風俗史』（廣西民族出版社・2015年）136頁。

27）覃彩鑾・盧運福『多維視野中的來賓壮族文化』（廣西民族出版社・2005年）176頁。

チワン人は新年や祭日のたびに花婆を祭祀する。『多元視野中的來賓壯族文化』に次のように記録する。

> 象州一帶的壯族臥室裏的花婆神位是用三根長約四尺的竹節合綁為一束，上掛用彩色紙剪製成的花簇，或從野外采回野花掛於其上；現在多已簡化為只在牆上貼一張紅紙，下設一個供插香的小香爐，象徵花婆神位。逢年過節祭完祖先神後，還要祭花婆。每逢農曆初一和十五這一天的早上，家庭主婦抱著小孩來給花婆神上香祭拜，口中念“請花婆賜福保佑孩子快長快大，長快如竹笋，力大如雷公”等祈語，並求花婆神賜花送子。對於花婆神位須小心保護，不得隨意觸動，更不能碰壞其香爐。[28]

上述の文献はすべて一般民衆の日常的な花婆信仰の活動である。

筆者も一般民衆の日常的な花婆信仰の活動についてのフィールドワークを行った。靖西では、家で線香を供える活動がある。靖西の家では香炉を安置する。この香炉には常に三本の線香を供える。当地の人の説明によれば、その中の一本は花婆の祭祀のために供えるものである。靖西の人々が神棚に線香を供えるのは日常的なことである。祭日や家に用事がある時も、神棚に線香を供える。靖西地方では、一般民衆の日常的な花婆信仰の活動は主に花婆に線香を供えることである。筆者が調査していた南寧市の伶俐鎮、下均村、河池市の巴馬、鳳山、平果県の感圩屯など、それらのチワン族民衆も同じのように家で香炉を安置し、旧暦の一日や十五日、新年や祭日などの日に花婆に線香を供え、供養する。

筆者はまた広西南寧市近郊の下均村の一般民衆の日常的な花婆信仰の活動について調査を行った。

下均村は広西民族大学の西隣に位置する。村には雷姓が多い。この村では家ごとに花婆の位牌を供養して、常に祭祀していると聞いた。下均村では子供の出生後、花婆の位牌を立てる習俗がある。だが、下均村では花婆廟がなく、儀式を行う宗教職能者もいない。そのため、花婆信仰活動は主に一般民衆の日常的な信仰活動に反映される。そこで筆者は、同村での花婆信仰の状況について、花婆信仰に詳しい村の老人陳春娥[29] を訪ねることにした。

陳春娥さんはちょうど還暦を迎えたところで、子供の時、学校に通ったことはないが、独学により文字を読める程度である。陳さんは村の方言を話すため、同行する雷君と雷君のお母さんが通訳をしてくださる形で下均村の花婆信仰についての聞き取りをおこなった。

陳春娥さんの話は以下の通りである。

下均村では赤ん坊が生まれてから三日経つと、外祖母が肉を持って子供に見に行く。赤ん坊が女の子の場合、肉の量は300グラムに決めてられている。これは、次は男の子が生まれることを願うことを意味する。男の子であれば肉の量はいくらでも良い。同時に花婆を祀る準備をする。

赤ん坊が生まれてから十一日経つと、子供の外祖母が花輪を自作する。あるいは市で買って、産婦の部屋へ持っていく。「花輪」は皿程度の大きさで、夫婦が赤ん坊を抱き、一匹の馬に乗っている絵が描かれている。絵の周囲には白と赤の紙でつくられた花が大量に貼られる。この日に花輪は植木鉢に植え替

28）覃彩鑾・盧運福『多維視野中的來賓壯族文化』（廣西民族出版社・2005年）179頁。

29）陳春娥、下均村の村民、女性、63歳。

えられる、これを「種花根」と称する。この花輪を花婆の神位と見なして、赤ん坊が十六歳の誕生日を迎えるまで家に安置し供養される。

下均村村民家の花輪

花婆を祀る供え物として、外祖母はもち米で造ったご飯、芭蕉、アヒルの卵と雄鶏一羽などを持って来る。これら供え物の準備を手伝って持ってくる人は必ず村の中の「好命人」でなければならない。「好命人」とは、年をとって、夫婦ともに健在で、子女があり、子孫も多い村人を指す。

花輪を植木鉢に移し替える過程は極めて厳しい手順がある。以前は、植木鉢の中にもち米の稲の灰を入れていたが、現在では砂利で代用される。植木鉢の底には七枚の硬貨と二つの小石を置き、花輪の根本は九枚の硬貨でくくる。陳春娥さんは、七は「生」、九は長いの「久」、石は子子孫孫後代万世の意味である、と説明してくれた。また、花輪は「吉日逢宗種花根、花根保娘娘生子、阿哥來到阿弟跟、哥哥弟弟狀元公」と唱えながら植木鉢に移し替える。

この言葉の意味は、吉日に花輪を植え、花輪が母と子の安寧を守り、兄の後には弟が続く。つまり「次も男の子が産まれるように」と言う意味の祈りである。

下均村で男児が生まれた家庭では、必ず「花輪を植える」という「儀式」をおこなう。本来、女子が生まれた家庭では必要はないが、今では女子のためにも儀式を行う家庭が徐々に増加してきている。しかし、女子のための儀式は、男子のそれと比べ違いがある。男子の儀式は生まれてから十一日目の朝に行い、女子の儀式は生まれてから十二日目に行う。この時、「吉日逢宗種花根、花根保娘娘生子、阿姐來到阿弟跟、哥哥弟弟狀元公」と唱えながら花輪を植木鉢に移す。この言葉の意味は、姉の後には弟が続くことを願う。

下均村の人々は、この花輪を花婆の神位と見なしている。清明節以外の祝日には村民達は花輪の前に線香を供え、花婆を祀る。特に旧暦三月六日は、花婆の生誕日であるため、子供が病気を患った、または、真夜中に騒いて泣くなどのことがあれば、花輪の前に線香を供え、子供が将来、健康・従順・聡明・機敏となるよう花婆に祈る。

子供が十六歳の誕生日を迎えると、花輪を竹林に持っていき、そこに安置する。その意味は後代になっても竹のように子孫が繁栄するようにとのことである。花輪を送る時は、必ず花婆に「子供が大きく

なった。もう自立できるようになった。長い間お世話になりました」と言う。むろん、竹林に移さず長らく家に安置する人もいる。

南寧市の蒲廟鎮にも子供が出生後に外祖母が花を送り、花婆位牌を立てる習俗がある。これは主に赤ん坊が生まれてから十二日経ったのち行い、「十二朝」と称する。満一か月になる時も行ってもよい。蒲廟に外祖母から送ってもらう花は根が付いていると考えられるので、「種花根」のような儀式がない。花を贈るのは子孫の運を損ずる恐れがあるので、自分の孫に福を保つため、外祖母側は一回しか花を贈らない。そして、初産しか花を送らない。分家し転居する時にも、新婦側の親が花を贈るが、これは多子多福の意味である。同じく一回しか贈らない。また転居しても、贈らない。それ以外、旧暦正月十五、三月三、七月十四、八月十五などの節日に花婆位牌を祭祀する、鶏や鴨を供えて、花婆に子供の健康を加護すると祈る。

おわりに

チワン族社会では、花婆は常に祖先と土地神と共に家中の神棚に祀られ、旧暦の毎月１日と15日に香を供えて祭祀する。日常生活のなかで、民衆自身が家族や親族だけに花婆に関する活動を行う。

しかも、チワン人は往々にして人生の区切りや危機に遭った時に宗教職能者を招いて、盛大な花婆信仰の儀礼を行う。例えば、誕生儀式、婚礼、葬礼などである。そのほか、結婚して長期間妊娠しない場合や、家族が病気でなかなか治らない場合も、宗教職能者を招いて花婆に対する儀礼を行う。

宗教職能者を招いて儀礼を行うには高額な費用を必要とする。裕福でない村民がいくら花婆に敬虔な態度であっても、宗教職能者を雇うには大変である。そのため、花婆信仰の活動は、主に一般民衆が個別に花婆信仰活動を行う。参加者は家族や親族である。活動に最も重要なのは「外家」[30] と呼ばれる外祖母家である。

一般に、花婆に関する信仰活動は一般民衆が個別の形で行う花婆信仰活動の割合が大きく、宗教職能者が行う活動の割合が小さい。しかし、必ずしもそうではない場合もある。筆者のフィールドワーク調査によると、地域によって、人によって、状況が異なる。

一、一部の地域では、花婆信仰の活動は主に一般民衆の日常な活動の一部分である。そのため、特別に宗教職能者を招いて行う活動のほうが少ない。ただ、別の一部地域では主に宗教職能者が行うことの比重が高い。

二、宗教職能者を招くか、日常な活動で儀式を行うかは、往々にして個人の財力や身分などによる。一定の財力や社会的地位を有する人が花婆信仰活動を行う場合、往々にして宗教職能者を招いて、盛大な儀式を行う。これは人類学でいうポトラッチ[31] に近いものである。裕福でない人、あるいは地位がな

30）外家：外祖母一家を指す。新生児のため行われる花婆信仰儀式なら、外家は新生児の外家、新生児父母の外家、時にも新生児祖父母の外家を含む。

31）ポトラッチ：北アメリカ太平洋岸のインディアン社会に広くみられる、威信と名誉をかけた贈答慣行である。主催者は盛大な宴会を開き、客に蓄積してきた財物を惜しみなくふるまって自らの地位と財力を誇示する。アメリカの人類学者フランツ・ボアズ（Franz Boas）が最初に提示し、ルース・ベネディクト（Ruth Benedict）が再び解釈し

い人は宗教職能者を招くことは少ない。

三、万事順調で幸運であり、健康で、子孫も多いという人がいる。そういう人は自然に盛大な宗教職能者が行う花婆に関する信仰活動を行う必要がない。別の人は運勢が悪く、体調も不良である。その場合は宗教職能者を招いて儀式を行い、花婆に加護を願う必要がある。むろん、花婆に対する信仰の度合いも儀式を行うことに影響する。

このように、各地の習慣と個人の状況により、花婆に関する習俗を行う形は異なっている。

たものである。